

鈴木 一平

1. 事業実施の目的

クリスの考古学的研究のための実地調査

2. 実施場所

インドネシア・中部ジャワ州、インドネシア・バリ州、ベトナム・ホーチミン市

3. 実施期日

2023 年 8 月 24 日 (木) ~ 2023 年 9 月 21 日 (木)

4. 成果報告

●事業の概要

本事業は、クリスの年代研究を実現するために必要な遺跡と資料の調査を目的に実施された。この調査では以下の 3 項目について、一次データを収集した。

a. 東ジャワ・ヒンドゥー遺跡調査

インドネシア、ジャワ島東部には 10-15 世紀を中心とするヒンドゥー遺跡が多く現存するが、クリス研究に直接関係するシンガサリ-マジヤパヒト期 (13-15c) の遺跡を訪れ、遺構の位置関係および現存状況を確認した。調査は 2023 年 9 月 1 日から 17 日にかけて実施し、東ジャワ州シドアルジョ、パスルアン、マラン、バトゥ、ブリタル、トゥルンアグン、クディリ、モジョクルトに位置する遺跡を対象に写真による遺構全景とレリーフ・装飾部全点の撮影、および GPS 機器による地理座標のデータを取得をした。

b. プナンゲンガン山遺構群調査

ジャワ東部モジョクルト県とパスルアン県にまたがるプナンゲンガン山 (1,653m) は、ジャワにおけるマハーメールとして神聖視され、山中には多くの石造遺構が点在する。クリスの年代研究上重要な石像 (現ジャカルタ国立博物館蔵) が本山から出土したとされており、そのことを念頭に 2023 年 9 月 3 日から 4 日にかけて山中に点在する遺跡を踏査し、遺構やレリーフを撮影した。プナンゲンガン山とその周辺の遺跡については 1951 年に出版された *Peninggalan-peninggalan Purbakala di Gunung Penanggungan* に詳しい報告があるが、そこに示された遺跡の分布図は現状の遺跡分布状況とかけ離れているため、GPS 機器を用いより正確な遺跡の地理座標のデータを収集した。

c. 絵画資料調査

クリスの年代研究上重要な指標資料である鏝阿寺 (足利市) 所蔵のクリスの調査を 2023 年 6 月に実施したところ、クリスの鞆にワヤン・スタイルと呼ばれる人物表現が彩色をもって描かれていることが明らかになった。報告者はこの図像表現とバリ島で現在まで実践

されているカマサンスタイルと呼ばれる絵画スタイルとの間に、人物表現や画面構成において強い共通性が見られることを見出し、カマサン絵画についてのより詳しい調査の必要性を認識した。本調査は8月28日から31日、9月17日から18日にかけて行われた。バリ州クルンクン (klungkung) 県では、クルタ・ゴサ (kertha gosa) とバレ・カンバン (Bale Kambang) に残るカマサン絵画の実見と撮影をした他、現在カマサン絵画を制作している工房を見学し描画技法や画材について調査した。またウブド郡およびデンパサール市内では美術館や個人所蔵の絵画作品を実見、撮影することで、鞘絵画との比較のためのデータを収集した。

これらに加え、飛行機の乗り継ぎ先であるベトナムではホーチミン市歴史博物館およびホーチミン市博物館の展示を見学し、東南アジアの初期金属文化であるドンソン文化やサーフィン文化、ドンナイ文化を特徴づける主要な金属資料やその他遺物の観察と撮影をした。また東ジャワ州やバリ州でも各地域の博物館・資料館をたずね、レファレンス可能な資料所蔵に関する情報の蓄積に努めた。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって、報告者の研究課題の解決に有効な以下3点の成果を得ることができた。

・a. 東ジャワ・ヒンドゥー遺跡調査

東ジャワ州の遺跡のうち約57地点を踏査した。訪れた遺構やレリーフの全てに対して、精細なデジタル画像を取得することができた他、地理座標の情報を取得できた。今回得られたデータは、古代ジャワの人々の生活を理解する上で主要な情報源となるもので、今後の研究の基礎となるものである。特にマラン県のジャゴ寺院遺跡、ブリタル県のプナタラン寺院遺跡、クディリ県のテゴワンギ寺院遺跡では、現在取り組んでいるクリスの年代研究にすぐに利用可能なレリーフ画像のデータを取得することができた(図1)。またブリタル県のプナタラン博物館では、これまで報告がされてこなかった、クリスを背負うドワラパラ像の存在を確認することができた。ただし、一部の遺跡は移動手段や宿泊地に関する想定外の問題により訪ねることができなかった。これらの遺跡については、改めて調査に赴く必要がある。



図1：クリスを持つ人物を描いたレリーフ
チャンディ・プナタラン、2023年9月11日撮影

・ b. プナンゲンガン山遺構群調査

1泊2日の日程でプナンゲンガン山とその西に位置するベケル（Bekel）山を縦走し、山中に点在する19地点の遺跡を踏査した（図2）。遺構やレリーフの全てに対して、精細なデジタル画像を取得することができ、また先行研究では問題のあった遺跡の位置について、より正確な地理座標を得ることができた。データの分析は今後取り組んでいくが、今回踏査できたベケル山を含むプナンゲンガン山中の主要な遺跡については情報を刷新できると想定される。また当初の予定ではプナンゲンガン山の北面に位置するガジャ・ムンクル（Gajahmungkur）山中の遺跡も踏査するつもりであったが、今回は時間などの制約により回ることができず、再度の現地調査が必要である。



図2：チャンディ・クンダリソド
ベケル山北面、2023年9月3日撮影

・ c. 絵画資料調査

本調査により、カマサン絵画の画像データを大量に得ることができた（図3）。このデータを用いることで、強い共通性が指摘される、鏝阿寺伝来クリスの鞆に描かれた人物図像と比較することができるようになり、研究が大きく進展するものと期待される。またバリ州クルンクン県カマサン村では現在までカマサン絵画の製作を続ける職人の家を訪ね、製作過程の一部と道具・画材について調査した。クリス鞆に描かれた絵画の描画技法を考えるうえで有益な示唆を得ることができた。



図3：クルタ・ゴサ天井画調査
クルンクン、2023年8月28日撮影

●本事業について

調査期間中の 2023 年 9 月 16 日（土）夜、ジャカルタにあるインドネシア国立博物館の敷地で火災が発生し、報道によれば青銅・陶磁器・土器・木製品など 817 点もの資料が被害を受けた。報告者は文化財を研究対象にしているだけに、残念極まりない出来事であるが、このような事故は世界中どこでも起こり得るものであり、文化財は常に失われていく危険にさらされている。今回調査をおこなった東ジャワの遺跡の中には、20 世紀前半期に撮影された写真と比べ風化が進んでいるものも多く、場所によっては悪意ある人間によって切り取られ、散逸したものすら確認された。また行政による保全活動も行われているものの、保全と称して古い煉瓦が新しいものに置き換わり、発見当初の状態と大幅に形が変わってしまった例も多く見受けられた。

重要なのは過去の遺物は日々変化しているという事実である。それゆえ、できるだけ早いうちに多くの資料に触れデータを収集し、現状を積極的に公開することが望ましいが、報告者のようなキャリアの浅い学徒は経済的に制約が大きく、実現には時間がかかる。

今回の主な調査は、毎日短距離の移動を繰り返し東ジャワ州の 7 県に点在する 70 以上の遺跡を踏査するものであった。このような時間を要する基礎的な調査は、本事業による助成なしには実現が困難であったと確信している。日本に身を置きながらインドネシアの研究をすることは、現地の研究者やかつてのオランダ人研究者らと比べて地理的に不利な条件にあるといえるが、今回の調査がおおむね達成されたことにより、インドネシア、特にジャワをフィールドに研究をする学徒として、やっとスタート地点に立てた思いである。本事業に関わる全ての皆様に感謝申し上げたい。